

紋別地方における流氷観光を核とした地域活性化のための基盤整備検討調査			
調査主体	北海道紋別市		
対象地域	北海道紋別市	対象となる 基盤整備分野	道路、港湾

掲載

1. 調査の背景と目的

紋別港の港南地区を中心として整備を進めてきたガリヤ地区は、流氷を活かした氷海展望塔（オホーツクタワー）、砕氷船ガリニコ号、北海道立流氷科学センターなど、流氷観光のスポットとして冬の北海道ツアーの拠点となっている。一方、夏は、水辺に親しめる人工海水浴場やドライブ観光等の休憩ポイントとなる道の駅など、紋別市の玄関口として重要な地域である。

しかし、観光客数は、民間事業者等の誘客活動により、東アジア等からの増加が図られているものの、国内旅行需要は旅行者の嗜好性の変化や多様化による減少もあり、近年は低迷が続く状況の中、民間事業者等は、誘客に向けた観光客への積極的なアプローチを進めている。

一方、紋別市が所有、管理する港湾施設等の環境整備の充実が課題となっていることから、来訪者の利便性の向上を考慮した港湾施設等の検討を行うとともに、観光を地域経済の起爆剤に民間の活動と連携し、地域の特性を活かした賑わいのあるエリアづくりのため、地域再生計画を策定する。

紋別市では、今年度を観光再生元年としてスタートさせ、ガリヤ地区を遠紋地域の観光拠点として確立し、観光客の誘客を図り、交流人口の拡大、地域産業や中心市街地の活性化の推進を図っていく。



2. 調査内容

(1) 調査の概要と手順

はじめに、現地調査と来訪者へのアンケート調査を行い、来訪者の利用状況や実態を把握し、現状と課題を整理するとともに、道内観光の実情を把握した。

これらの整理を踏まえて、ガリヤ地区の各施設の整備に向けた方向性について検討するとともに、ガリヤ地区全体のプランニングについて検討する。

① 利用者ニーズ及び移動実態の把握

氷海展望塔（以下「オホーツクタワー」という。）利用者にアンケート調査を行った。



② 現状分析

本市の観光入込数、マーケットの現状及び観光振興の方向性を検討する。

③ 各施設の検討

オホーツクタワー、海洋交流館、とっかりセンター、人工海水浴場、道の駅、エリアの景観形成などについて、現状、課題を踏まえて整備の検討を行った。

④ 関係者とのヒアリング

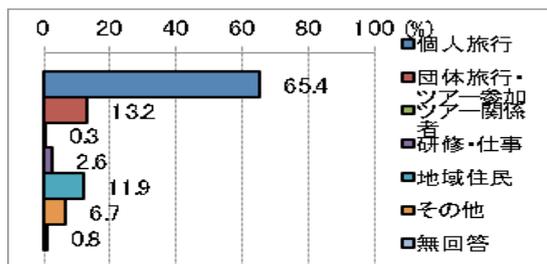
各施設の活用方法などの検討を行うため、施設所有者、観光関係者と協議を行った。

(2) 調査結果

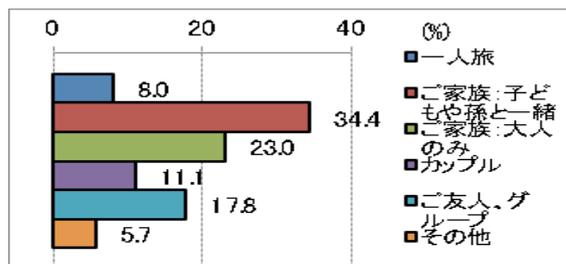
① 利用者アンケート結果

・来訪者の旅行スタイル、同行者、交通手段では、個人旅行が6割以上を占めた。自家用車による来訪スタイルが主流となっていることから、子どもや孫と同行する傾向が高い。

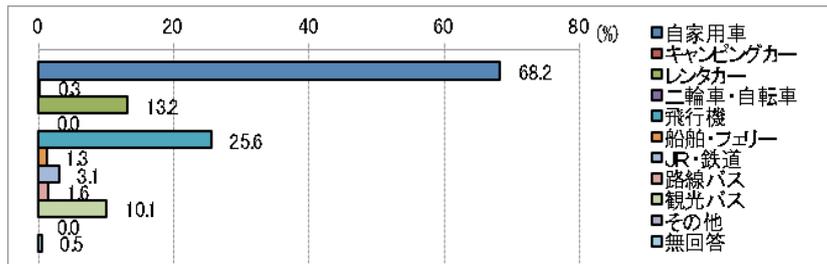
<旅行スタイル>



<同行者>

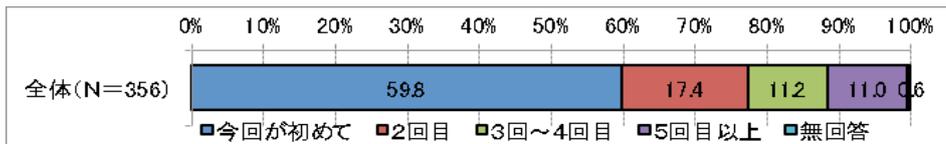


<交通手段>



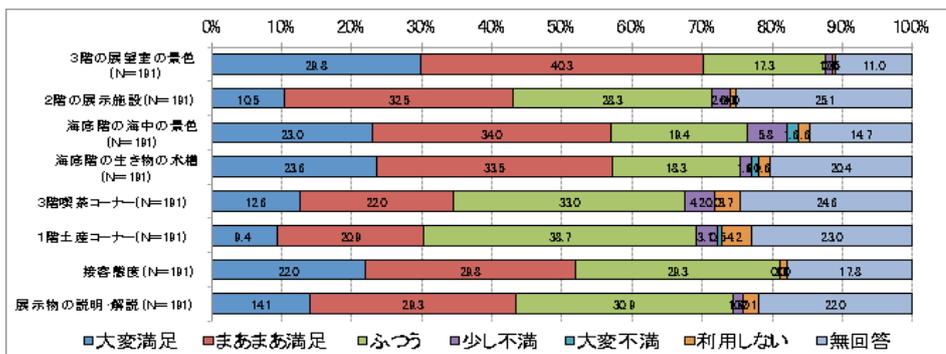
・訪問回数

リピーター率では、来訪回数が2回以上は全体の4割弱、3回以上は2割、5回以上は、1割となっていた。



・満足度

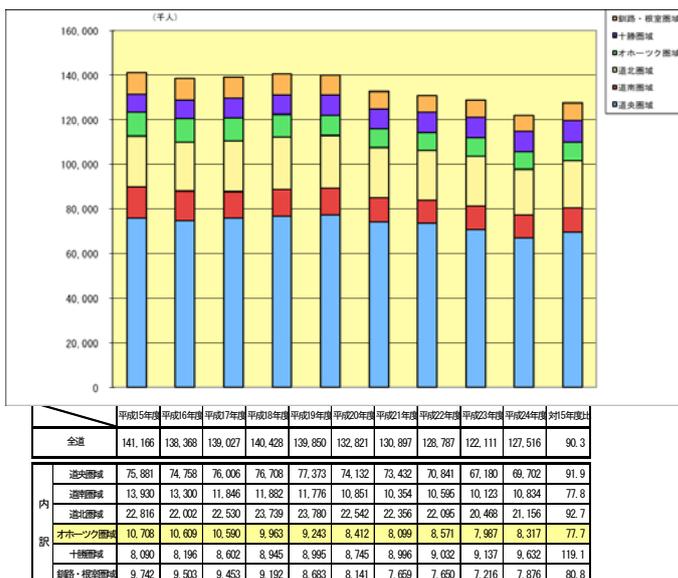
景色への満足度は高く、7割以上が満足している回答がある一方、少数だが不満であると回答があった。



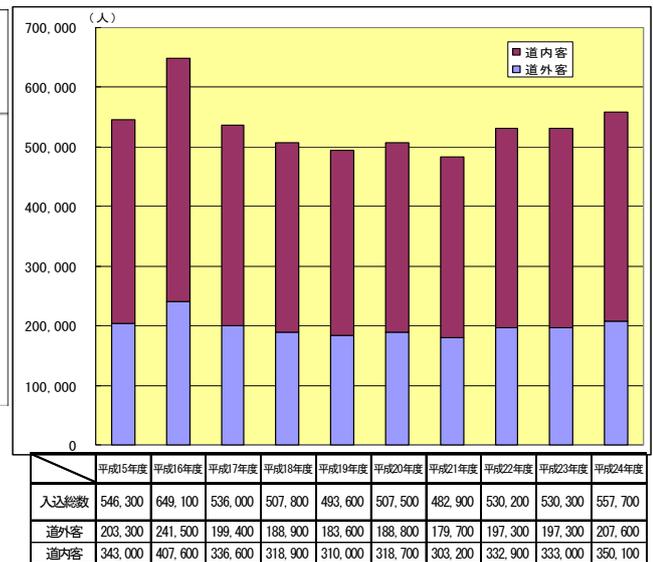
②現状分析

・道内の中でもオホーツク圏域への観光入込数は減少傾向にあり、紋別への観光客入込数も年間約50万人前後で推移している。

<道内観光入込>

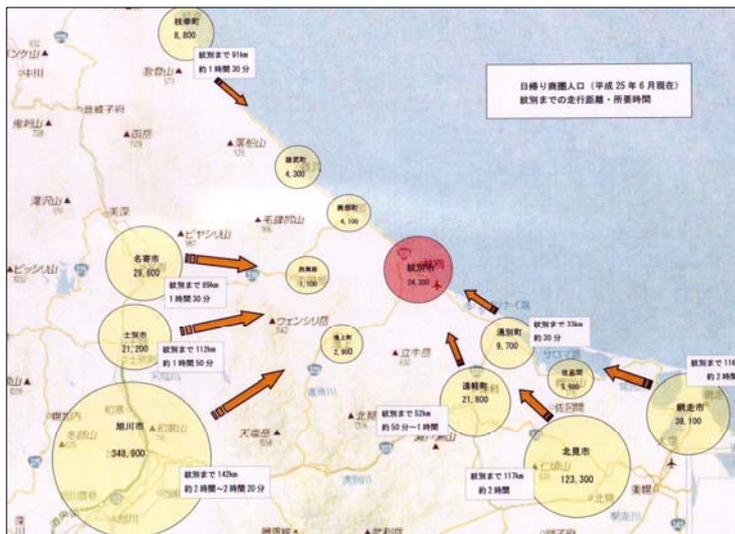


<紋別市観光入込>



- ・観光入込が増加する通常のケースとしては、「日帰観光」で人気を博し、次に道内全域で注目され、旅行関連のテレビ、雑誌等のメディアの露出が多くなることにより、道外客の入込増加に繋がっていく。

- ・日帰り圏の住民、特に人口が集積している都市部からの来訪により道内の中でも注目度が増し、メディア等の露出機会も多くなっていく。

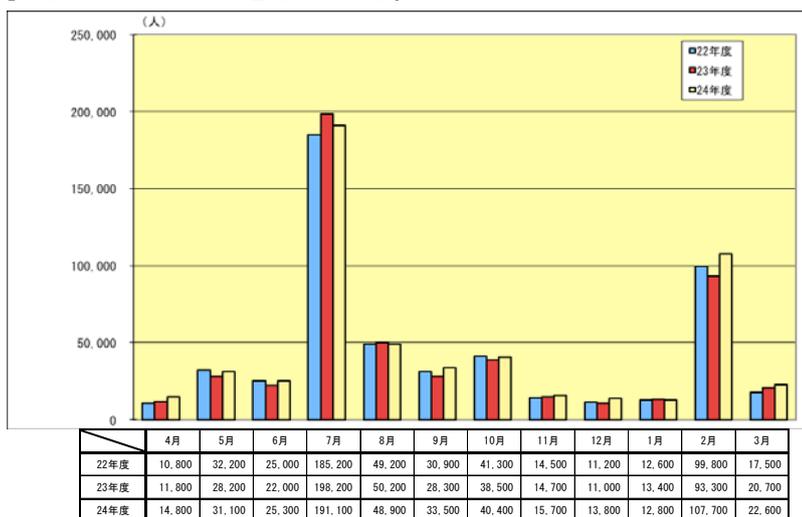


※旭川(人口349千人)から2時間～2時間30分 北見(人口123千人)から約2時間
 名寄(人口 30千人)から約1時間30分 士別(人口 21千人)から約1時間50分
 網走(人口 38千人)から約2時間等

- ・メディア等の露出機会が多くなるにつれ、注目度が広域にわたり、道内1～2泊圏域からの来訪機会が増加する。

※札幌圏(人口約2,500千人) 釧路圏(人口約200千人) 帯広圏(人口約220千人)
 函館圏(人口約 350千人) 室蘭・苫小牧圏(人口約 300千人)等

- ・代表的な資源である流氷を活用した流氷観光は、1か月半程度しか続かず、それ以外の期間の集客策が課題とされており、「流氷依存からの脱皮」⇒「通年観光の魅力度向上」を目指していく必要がある。



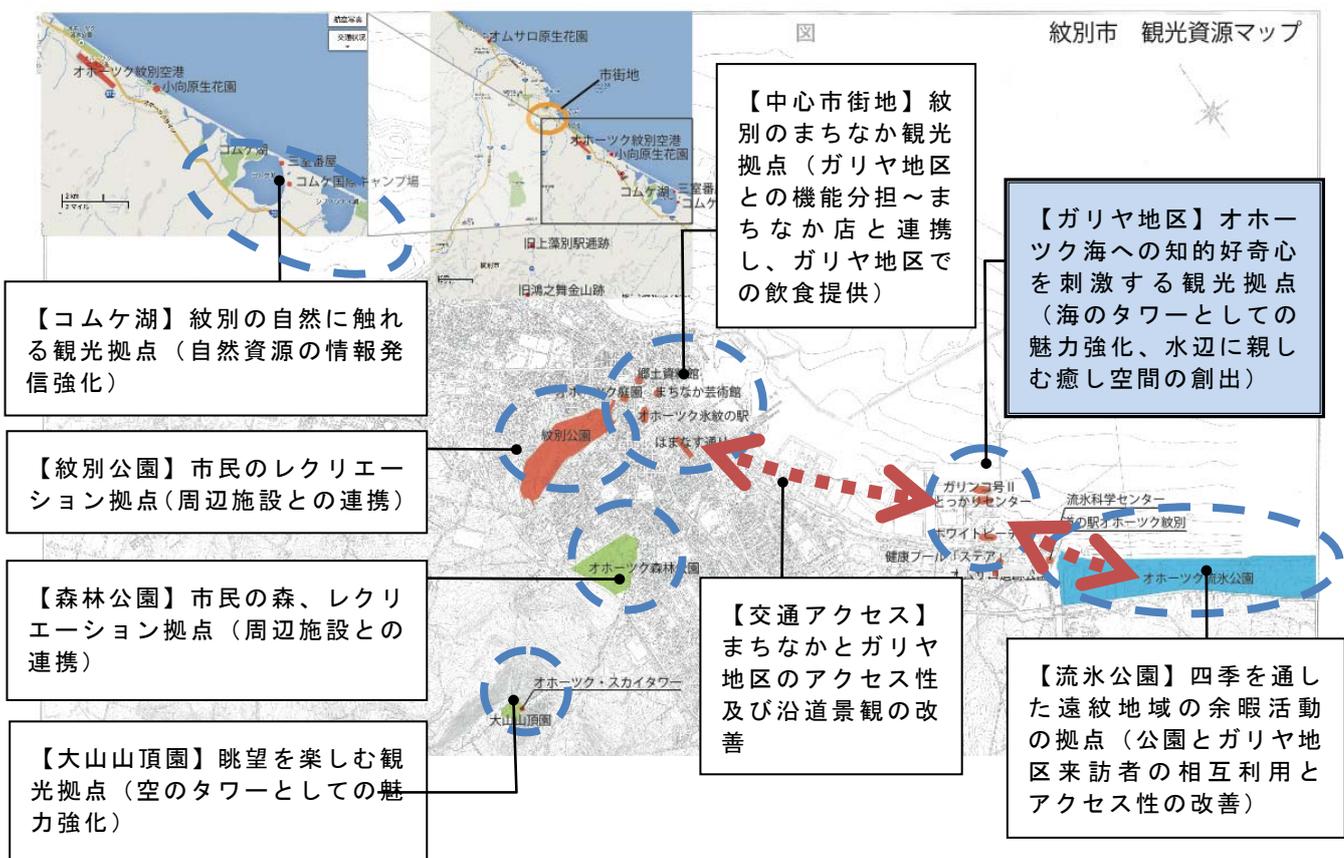
③関係者との意見交換

観光関係団体で組織する検討委員会（紋別観光協会、オホーツク・ガリンコタワー(株)、北海道立オホーツク流水科学センター、市港湾課、市企画調整課）及び市庁内検討会（理事者、港湾課、企画調整課）を計7回開催し、利用者ニーズ及び移動実態調査結果を踏まえたガリヤ地区のあり方や活用方法について意見交換、協議を行い、エリア、各施設の位置づけ、方向性、目指す姿等を整理し、行政と民間がそれぞれに必要な施設等の整備の検討を行った。エリアの位置づけ、ガリヤ地区の整備の方向性は下記のとおりである。

④港湾施設等及びエリアの検討

1) 市内施設との位置づけ

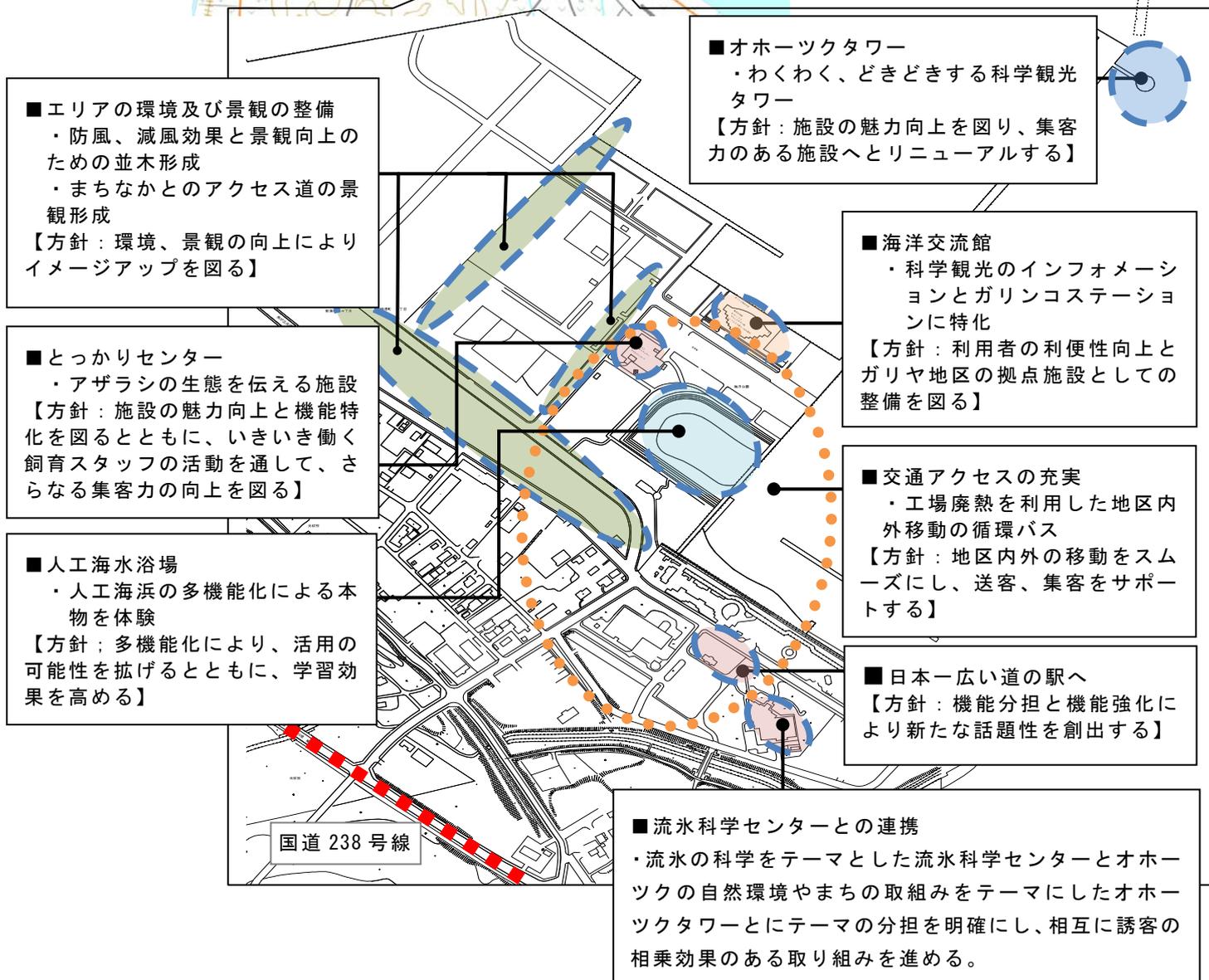
- ・市内における施設及びエリアにある観光資源の機能や役割を俯瞰し、ガリヤ地区の再整備に向けた方向性を位置付けた。



2) ガリヤ地区の方向性

本市は、オホーツク海に面した海洋資源が豊富で、自然条件に優れ、他の地域に比較して、流水と海は日々の暮らしの中で大きな役割を果たしてきた。

このオホーツクの地域の流水、海洋環境に関する研究成果や観光資源などを学習、体験できるエリアとなるよう「環境・科学観光」をキーワードに、施設、エリアの再生を行い、水辺に親しみ賑わいのある空間の形成を図っていくこととした。



また、公共で実施する基盤整備の方向性は下記のとおり。

3) 海洋交流館周辺

海洋交流館

海洋交流館は、砕氷船や港湾施設等を利用する市民等の休憩、来訪者と海とのふれあいの場所としての施設であるとともに、ガリヤ地区の総合インフォメーションセンターを担う施設として、施設の出入口の改良や休憩スペースを見直し、観光案内情報機能の充実を図り、地域の情報発信拠点として、来訪者の利便性向上のための整備を図る。

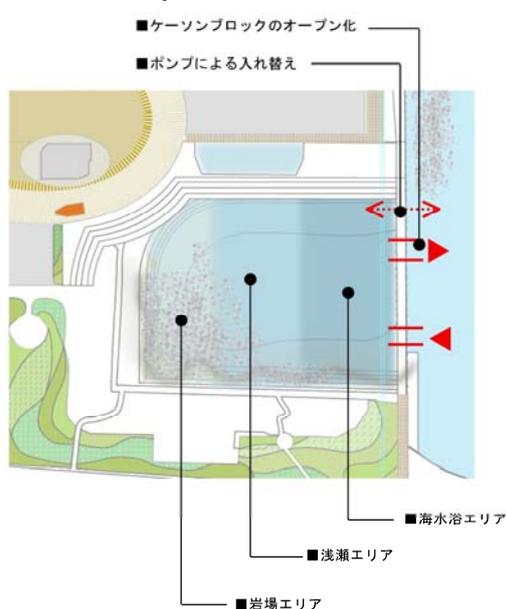
第4船溜物揚場

砕氷船の乗り場である海洋交流館前の岸壁の第4船溜物揚場は、直立消波構造ブロック部分の背後の路面であるインターロッキングに5cm程度の沈下が見られるため、その段差を解消し、ユニバーサルデザインの視点から歩行弱者に配慮するための整備を図る。

4) 人工海水浴場

オホーツクの自然に触れ合える海水浴場のほか、海洋生物の不思議な生態を観察しながら学べる機能を持つ体験型施設としての整備を図る。

- ・海水交換の活発なエリアは、海水浴場とし、岸側には、岩場や浅瀬などの多様な海岸環境を再現し、生態観察ができる環境を整え、多機能な体験型施設として、整備する。
- ・外海の海水交換がスムーズになるよう機能強化に向けた調査検討を関係機関に要望していく。



(人工海水浴場)



(イメージ)

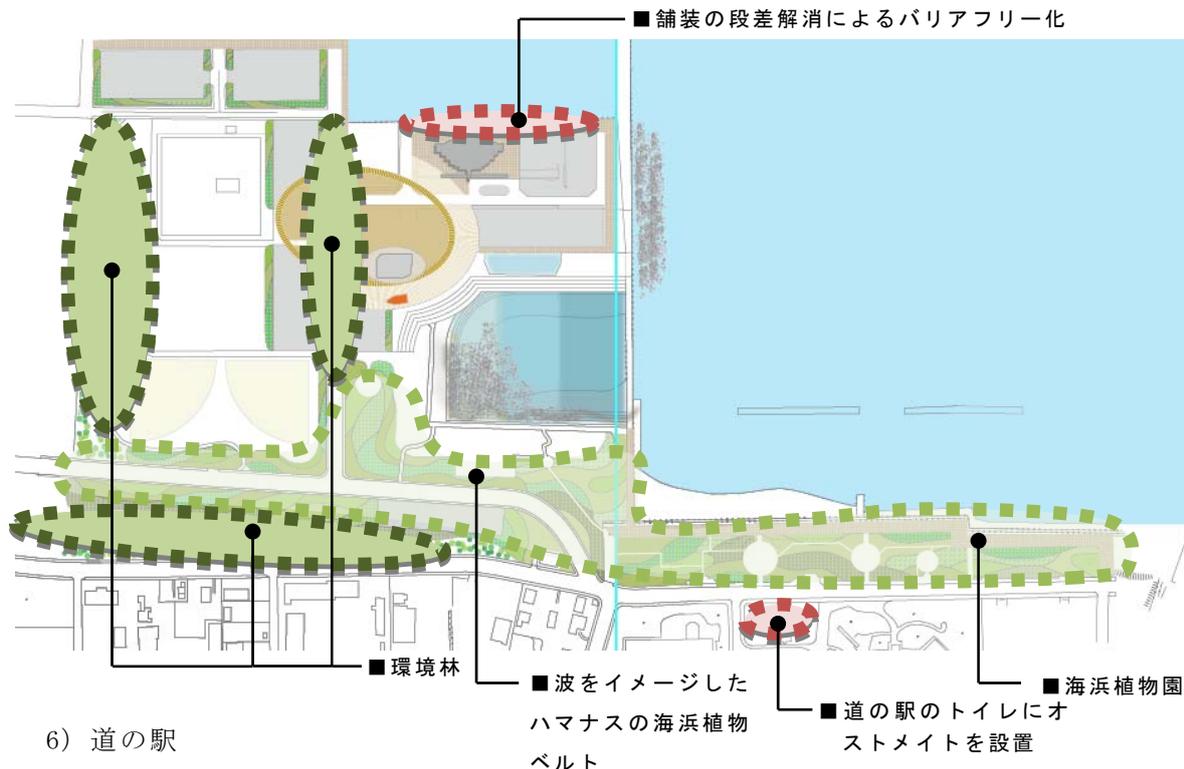
5) エリアの公共施設を利用する市民等の道路交通の確保のための整備

- ・ 防風、防雪のための並木形成

海洋交流館への道路である市道（港南1号線）は、特に冬場の吹雪による道路に吹き溜まりが生じ、交通障害が発生することがあるため、交通の安全確保及び景観の調和に配慮した環境林帯の形成のための整備を図る。

- ・ エリアとまちなかを結ぶ道路の安全を確保するための緑化

まちなかとガリヤ地区を結ぶ市道（新港港南線及び港南1号線）の丘側面は、崖面で崩落や雨水による侵食が進んでいるため、崖面の安定とエリアの景観向上を図るための緑化の形成のための整備を図る。



6) 道の駅

道の駅の求められる機能に関しては、地域産品が購入できる物販機能、防災拠点としての機能、地域の人々の集会所機能を持つ施設など地域産業の活性化に寄与する道の駅が主流である。今回の検討については、海洋交流館と道の駅との機能分担の整理やエリアへの導線の整理などガリヤ地区全体の骨格が具体化した段階で再度検討することとした。

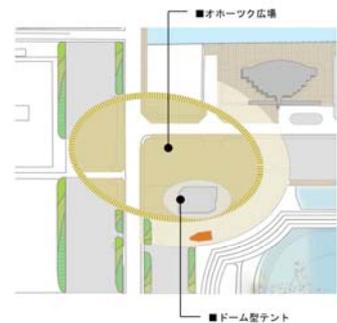
- ・ 現時点の評価としては、下記の A～D の 4 つの案を検討した結果、最も集客等の効果が期待できるのは、B 案の国道沿いに移転新設するのが最適とした。
- ・ 現在の道の駅に必要な機能としては、多様な利用者に対応した施設の充実が必要とされることから、トイレのオストメイト化し、ユニバーサルデザインに配慮する。

	A案	B案	C案	D案
	現在の位置での運営改修	国道沿いに移転	海岸交流館に機能移転	ホワイトビーチの位置に移転
立地案				
視認性・立寄率	× 国道からやや離れている。が既存道の駅の立地のため、認知度がある。	○ 国道からの視認性が良く、立寄率が高い。	× カリヤ地区の奥、国道からの認知は困難であり、立寄り率は非常に低い。	× カリヤ地区の中心部だが国道からの認知は困難。
アクセス性 (国道からの距離とルート)	△ 距離は近いものの、右折が必要。	○ 交通量の多い国道沿いに立地。道の駅としては好立地。	× 道の駅までの交差点が多い。	× 道の駅までの交差点が多い。
市街地への影響力	△ ハブとしての機能を付加することが難しい。	○ ハブとして機能しやすく、市街地への波及効果も期待できる。	△ ハブとしての機能を付加することが難しい。	△ ハブとしての機能を付加することが難しい。
経済性 (イニシャルコスト)	○ 土地調達費用が掛からない。	△ 土地買収費及び新築費用。	○ 館内改修を前提とするためイニシャルコストが少ない。	△ ホワイトビーチ撤去費用及び敷地造成費が大。
経済性 (補助金等の可能性)	× 補助金なし。	○ 国交省の補助金あり。	○ 農水省の補助金の可能性あり。	○ 農水省の補助金の可能性あり。
集客力 (ロケーションに基づく集客力)	△ これまでの認知度から、ある程度の集客力が見込める。	○ 国道沿いのため、目的地として以外の立寄りが容易。	× カリニコ用児童館への併設のため、冬場集客力が高いが、目的地としての集客力が低い。	△ C案よりもやや集客力が高いが大きな差はない。
総合評価	・流水科学館と健康プールの間に位置し、道の駅としての機能の弊害が多い。	・国道沿いのため立寄率が高く、カリヤ地区促進施設のPR 誘客が可能となる。	・既存施設の改修である為、新道の新築費の費用は少なくすむが、道の駅の魅力創出の面で難しい。	・国道からのアプローチ道路の改善によってはA案、C案より立地的に選ばれるが、ホワイトビーチ撤去等問題が多い。

7) その他の検討

- ・シンボル空間の創出

ガリヤ地区は、施設が点在しており、一体感を創出するため、エリア中心に求心力のあるシンボル空間をイメージした楕円の広場（オホーツク広場）を整備することも手段として考えられる。



3. 基盤整備の見込み・方向性

調査結果に基づき、ガリヤ地区の各施設の効果的な整備を進めることとしている。整備にあたっては、官民連携のもと、関係機関と調整を図り、各施設ができるところから事業化に取り組んでいく。

4. 今後の課題

再生の事業化にあたっては、さらに具体的な検討を要することから、個別課題について調整、解決を図り、財源対策を含め、緊急性、重要性を判断しながら、優先順位等を決定していく。

また、ガリヤ地区の魅力の向上を図るためには、官民が連携して、賑わいづくりの創出はもとより、市街地の活性化、地域振興につながる取り組みの強化が重要課題である。